

〔展覧会評〕

・『大阪毎日新聞』 昭和六年五月十四日

## 感想一、二

森田恒友

春陽会展も今年で九回を重ねるに至つた。早いものだと思ふよりは、何だかあまりに歳月の流れるのが早過ぎる気が強い。同じ在野の会で、二科と院展はもう十数回を重ねてゐるのに比すれば、春陽会展は未だ年齢が若いといへるが、それでも、もう九回になつたかと思へば、何だか、あまりに早過ぎる感が強い。世間的に考へれば、回を重ねるほど重味が増はり、信用が増して安全頑固な会になつた訳であるが、会内人の気持としては、いつも若い、新しい元気の満ちた気持を持続して行きたいことから、何だか、相変らず未だ二、三回を開いた気持であつたい、実際、それは春陽会は未だその気持が満ちてゐる。これからだといふ気持である。恐らくその気持は、場当たりをしない会だといふことは、一般の人達から認められてゐるに違ひない。大いに相勉めて、何回重ねても、これからだといふ気持を失はぬことにしたい。そこに何時も新らしさがあり、力がある訳だ。

これは独り展覧会に限らぬことだが、物事は「まアよかつた」と思つた時が来たらもう駄目だ。大いに自省せねばならぬと考へる。在野の展覧会

が帝展に比して、量の少ない割合に活気が保つ根本は、全く「これからだ」といふ気を湛へるところにあらう。それが欠ければ年々その場限りのお茶を濁すに過ぎなくなる。それではおしまひである。

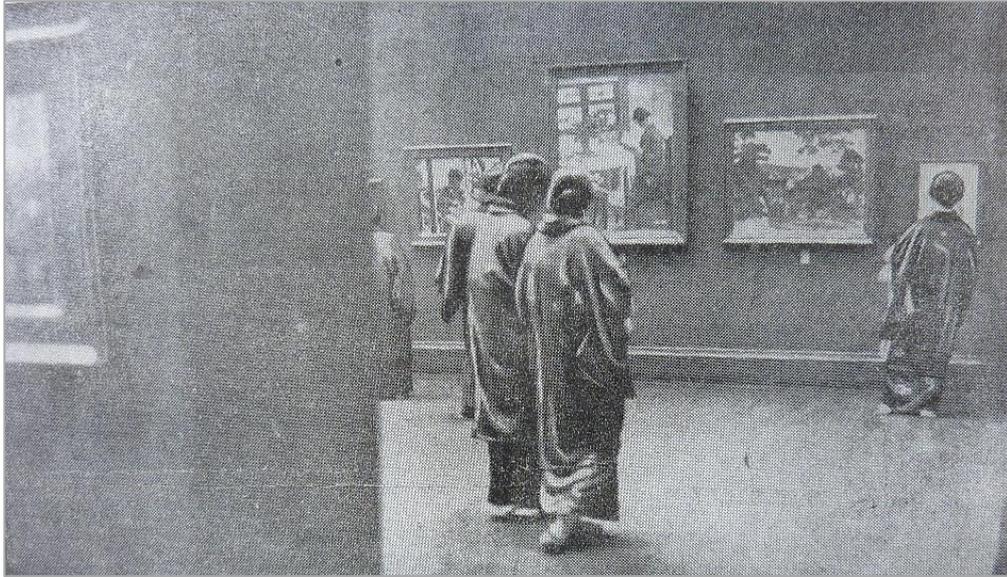
私は、今春感冒が初まりで二、三の病を併発し、少し長い日を病懶に過してしまひ、そのために春陽会への出品も出来なくなつたことを口惜しく思ふが、止むを得ない次第だ。だが全く健康を害して懶けるほど面白くないことはない。私はあへて展覧会本位に画を作る気持はない。ただ自身身の仕事が絶えず未完であり、随分遠い路を歩きつつあることを反省しつつあるために、せめて何事か、何物か、極めて小なる踏み出しの現れでも示しつつ行きたい。極めて小さい私の仕事も、自分自身に少しづつでも進めつつあるといふ気持に充ちながら歳を送つて行きたいだけだ。否、私のやうな仕事を続けて行く者には、せめてさういふ自分だけの心でも充ちてゐないと何の張り合ひもなくなるかも知れぬ。

健康を損ずると、困つたことに画が描きたくない。随分筆を執ることの好きな自分だが、描くのがいやな日が続く。昔はさうもなかつたと思ひ、幾分気持のよい日には画室へ座して見るが、気乗りがせず、無理に筆を執れば翌日からまた寝込んでしまふ。随分それはいやなことだ。素人はよく気分といふことをいふが、実際は気分といふものは単なる軽い気分だけのものでなく、健康と密接した、切り離すことの出来ないもので、健康もよく、脂が乗つて、どん／＼画が出来て行くといふ時ほど画人にとつて嬉しいことはない。毎日画が描きたいと思ふやうにどん／＼描けて行く、とい

1931 14 May

昭和6年(1931年) 春陽会第9回展 森田恒友「感想一、二」(大阪毎日新聞)

春陽会第九回展会場  
(東京府美術館)



ふことであれば、最大の画家の幸福と言えやう。